

# 島根県

## 出猟記録の分析結果の報告(Ⅳ) —イノシシ編—

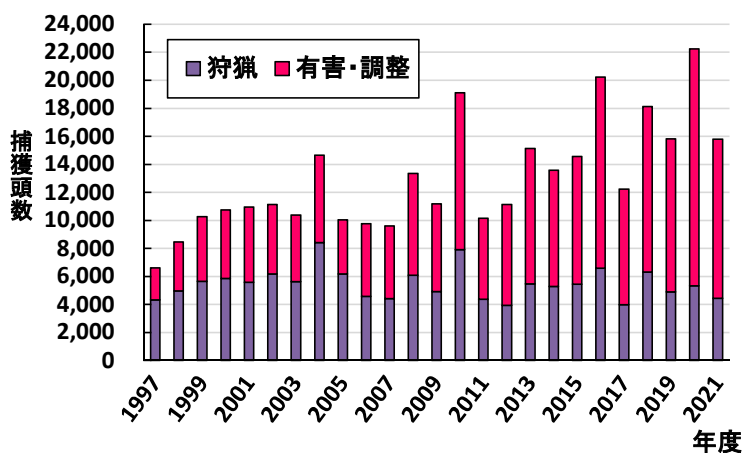


### —島根県の狩猟者のみなさまへ—

毎年、「出猟記録」へご協力をいただき、ありがとうございます。この分析によって、イノシシの分布域や生息密度を把握することができました。

2020年の報告(Ⅲ)以後の分析結果(Ⅳ)の一部を紹介します。

### 県内における捕獲頭数の推移



島根県におけるイノシシ捕獲数の推移

年度ごとの狩猟と有害捕獲の合計捕獲頭数は、年度によって変動はあるものの、おおよそ1万から2万頭で推移しています。2021年度の捕獲数は、狩猟4,450頭と有害11,336頭の合計15,786頭でした。

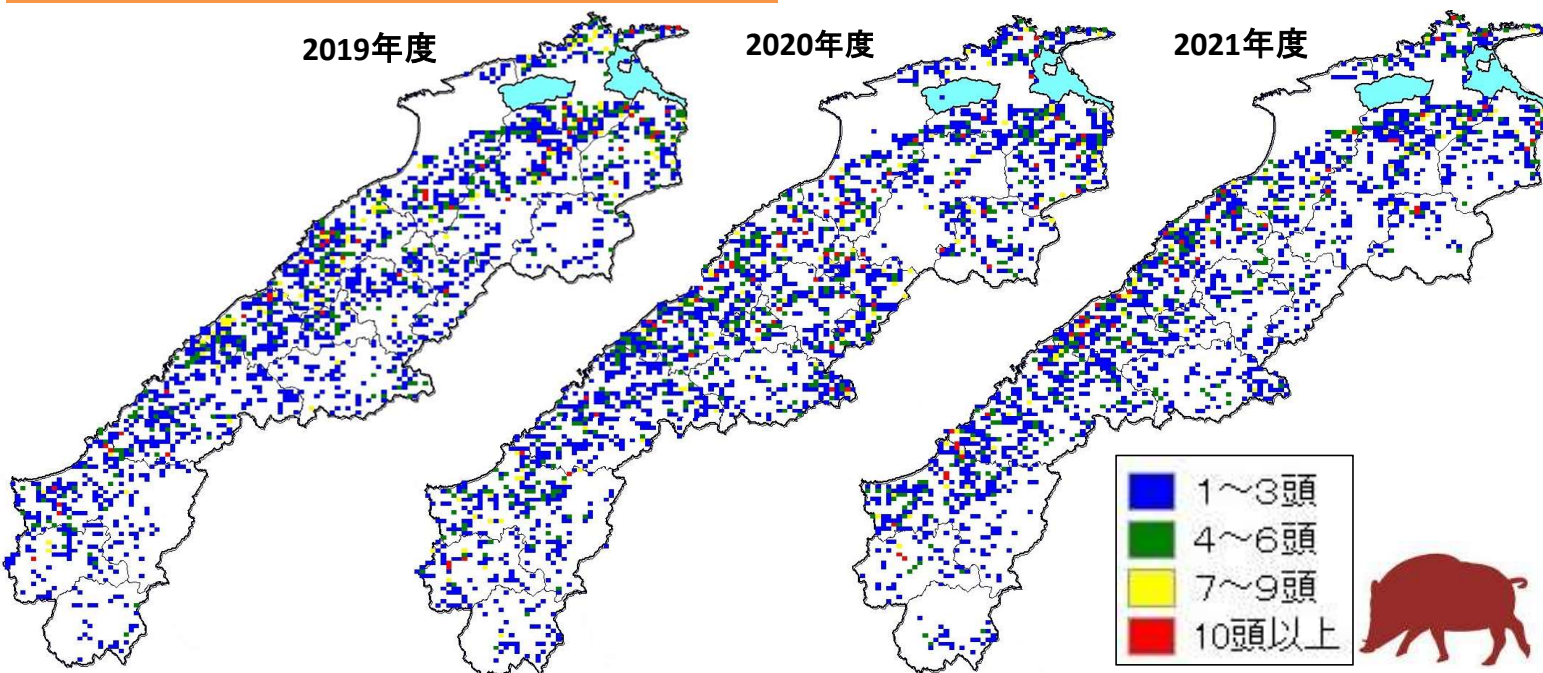
全捕獲頭数における狩猟と有害捕獲の割合は、2005年度までは狩猟が高い割合を占めていましたが、2006年度に逆転し、それ以降は有害捕獲が高い割合を占めています。2021年度においては、捕獲数全体の72%が有害捕獲によるものでした。

### 狩猟における捕獲場所と捕獲頭数

2019年度

2020年度

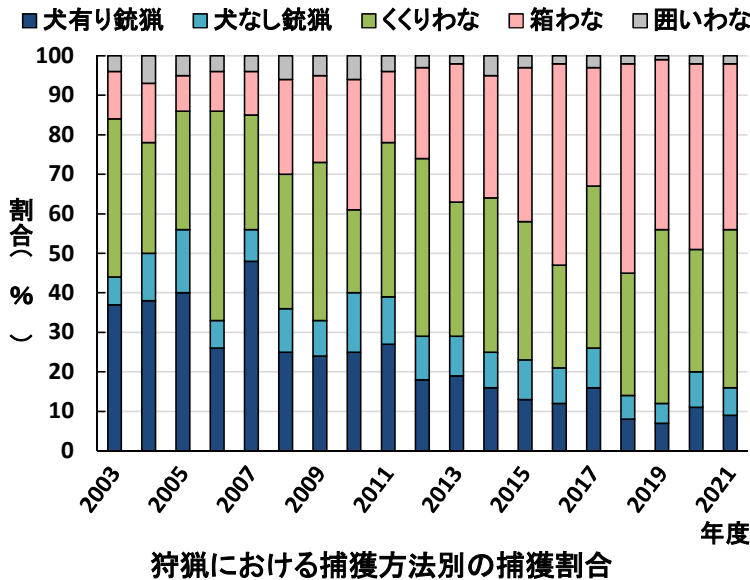
2021年度



狩猟によるイノシシの捕獲場所を1km×1kmメッシュ別に見ると、松江市と出雲市の市街地や、もともと生息していない隠岐諸島を除いて、ほぼ県下全域にイノシシが分布していました。

狩猟によるイノシシの捕獲数は、2019年度が4,895頭、2020年度が5,342頭、2021年が4,450頭であり、イノシシが捕獲されたメッシュ数は、2019年度が1,712、2020年度が1,835、2021年が1,629でした。狩猟によるイノシシの捕獲数が多い年度は、捕獲メッシュ数も多くなっており、より広範囲でイノシシが捕獲されていました。

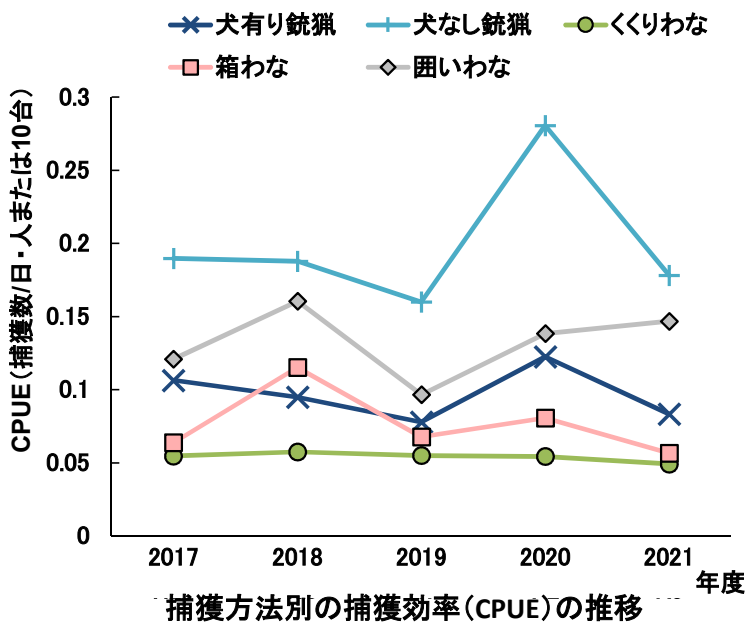
# 捕獲方法別の捕獲割合



犬有りと犬なしを合わせた銃猟の捕獲割合を見ると、2003年度～2007年度は、2006年度を除いて40～50%台と高い割合を占めています。つまり、狩猟で捕獲されるイノシシの約半数を銃猟によって捕獲していました。しかし、その後銃猟の割合は減少し、近年は10～20%台で推移しています。その代わりに、箱わなの捕獲割合が2008年度以降増加し、近年は30～50%台で推移しています。このことから、**島根県の狩猟の傾向として、銃猟での捕獲が減り、箱わなでの捕獲が増えている**と言えます。

2003年度の調査開始時から、くりわなの捕獲割合は概ね20～40%の間で、囲いわなの捕獲割合は10%以下で推移しています。

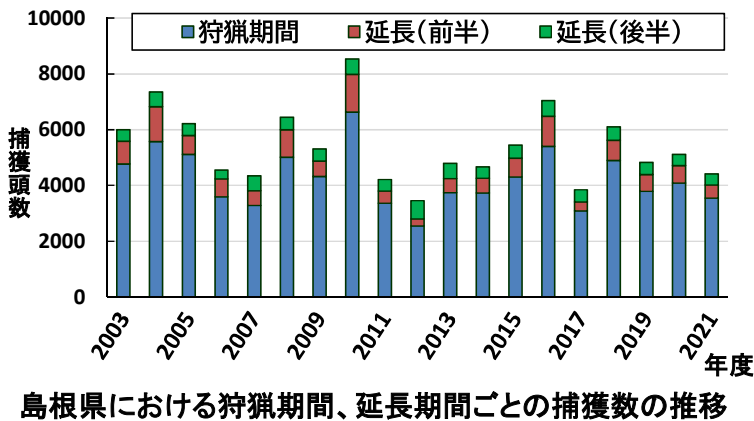
# 捕獲効率(CPUE)による生息数の動向



狩猟期にイノシシ猟、またはシカ猟を行った狩猟者を対象に、捕獲方法別の捕獲効率(CPUE)を算出しました。2017～2021年度の5年間に於いて、上記の捕獲方法別の捕獲割合とCPUEの推移を見てみると、2017年度は銃猟の割合が高く、2020年度は犬なし銃猟のCPUEが高い値でした。一般的に、積雪が多い年はイノシシの活動が阻害され、銃猟で捕獲しやすくなりますが、2017年度と2020年度は5年間の中でも多い積雪量でした。また、イノシシにとっての餌資源である堅果類が豊作であると、箱わなや囲いわなでの捕獲が難しくなります。箱わなや囲いわなの捕獲割合やCPUEが低い2017年度は、県内でコナラが豊作でした。

一方、気象や堅果の豊凶に影響を受けにくい、くりわな猟のCPUEはほぼ変動がないことから、イノシシの生息数はほぼ一定で推移していると考えられました。

# 狩猟期延長による捕獲効果



島根県では、2003年度から狩猟期間を11月前半と2月後半のそれぞれ2週間、合計1ヵ月間延長をしています。この延長期間中の捕獲数は、当該年度の総捕獲数の18～24%を占めています。このことから、**狩猟期間の延長は、狩猟による捕獲数を1.2～1.3倍に増加させています。**

近年、多くのイノシシを捕獲していますが、生息数は横ばい傾向であると考えられます。今後は、現在捕獲頭数の大部分を占める有害捕獲において、親と子を同時に捕獲するなど、生息数の低減に効果的な捕獲を推奨していく必要があります。



イノシシ対策に役立ってますので、  
今後も出猟記録へのご協力をお願いします。

MOUNTAINOUS REGION RESEARCH CENTER  
島根県 中山間地域研究センター

〒690-3405 島根県飯石郡飯南町上来島1207

